通信
支部
同舟
No. 39号
3月
3月12日編集発行
東京都宅地建物取引業協会府中支部
編集兼発行人 高野豊次

三月定例理事会開催

とき　三月十一日午後四時より
ところ　ダイワ不動産
出席者　内山、結城、平井、槇峠、五島、山村、辻、高野各理事、加藤監査、鈴木氏
要領次の通り
一、協議事項
(イ)　第二回支部定時総会について
第二回支部定時総会は来る四月七日午後四時より開催のことに決定
会場は料亭大国の予定、尚会費は支部負担につき全員もれなく出席を希望する。招集状は四月三日迄に発送見込。
二、報告事項
(イ)　新理事選出について
新理事は二月末を以て各地区毎に選出を終了した。何れ総会に諮る予定。
(ロ)　宅建業法改正運動推進特別対策委員会委員任命について
右委員は支部長指名により山村、加藤（武）両氏が任命された。
(ハ)　東京都指導部実態調査について
去る二月二十三日東京都指導部の実態調査があり左の店舗が調査を受けた。
昭栄商事　丸山不動産　玉光不動産
三友不動産　三多摩産業　日本宅地保証　天光不動産　住宅信販
尚調査の結果は何れも台帳の不備が指摘され都庁に呼出しを受けた者が二、三あつた。
当支部よりの立会者　辻、結城両理事

人と店

府中宮西町三丁目に三愛不動産がある。
店主川内万久君は目下病気のため立川病院に入院中であるが、尚長期療養を要する模様なので実にお気の毒である。
ところで川内君は九州小倉の産、本年三十八才、出身校は苅田中学（旧制）である。
而して学校卒業後は郷里に於て一時電気商会などを経営したこともあるが間もなく立川に出て「おこのみ焼」などを開業し、かなりの繁盛を呈した。
昭和三十九年に八広不動産に入社し同年施行の取引主任者試験に応試の結果合格を得たので四十年七月現在の地に独立開業した。
君は根が一本気質で人柄は至つてよく九州人にあり勝な所謂正義と義侠に富み人から頼まれれば水火をもいとわぬと云う心の持主である。
その一例として昨夏筆者が病気で入院し輪血を必要としたとき当時私と川内君はそれ程の交渉を持つ仲ではなかつたが君は進んで預血を快諾され私の一命を救つて下さつたことは、今ここで筆舌にては表し難くその義侠心に対し心から深甚の謝意を表するものである。
現在の三愛不動産は佐久間静枝（昭和四十一年取引主任者試験合格）が川内君の代務をし東京芝浦関係等を地盤として順調に営業を続けているが、以上の様な事情もあるので支部の諸賢は陰に陽に三愛を応援してやつてほしいものである。
この外立川では、昨夏より寿司屋をも開業しご本人が入院中と雖も西に東に采配を振らねばならぬ立場にあり従つて仕事も大事ではあるが、余りにもあせらず長期入院も又人生修養の一つであることに思いをいたし、自重自愛一日も速やかに快気あらんことを神かけて祈る次第である。

友を思う

高野生

釣には釣友達、碁には碁友達がある様に友人には種々雑多な友達がある。
然しこれらは単なる趣味とか趣好上での友達であつて、それらを超越して真に裸になつて私生活までもつきあえる友達はそうザラにはあるものではない。
私がN省の或特別会計の大将をしておつた頃である。当時国の会計を検査する人にM氏

があり、こちらはその人から会計の検査を受ける立場にあつた。

どちらかと云えば検査をする人とこれを受ける側とでは自ずと或程度の間隔があり、なかなかと近寄り難いのが常である。

ところがこのM氏とは虫がすくとでも云うのか馬があうとでも云うのか何日とはなく近接する日が多く遂に兄弟盃をするまでの間柄に進展した。

従つて公のことは別として私生活についてもお互いに助けあつたり助けたりで特に戦事中は助けあうことが多かつた。

M氏には三人の子弟がある、何れも適令期にあつたので私は東大を出た長男に嫁を世話し（長男は数年前農学博士となつた）末嬢は医学博士のところへ嫁ぐ仲介をするなどの労をとつたこともある。

特に堅く守られたことは正月元旦にはM氏が私の宅を訪れ正月の三日には私がM氏の宅を訪れると云う不文律的な定めがあり、これが今年で十八年の長さに亘り一度も欠かすことなく不思議に続いている。

ところで今年の正月三日に私がM氏の宅を訪れると何日になく元気がないが喜んで私を迎え、そして万一自分がなくなつた場合は遺産のことなど事もこまかに遺言めいたことを私に頼むのであつた。

尤もM氏はよわい七十五で最近は健康もすぐれないので或はそうしたことを気にして私に頼んだのかもしれないがその後まもなく入院して一月末に忽然と他界されてしまつた。

私としては片腕をもぎとられた様なそして言葉では云い表せない悲しみと落胆を見たものである。

M氏は役所を辞めてからは役所と関係のある或連合会の理事を何期かやり尚現在もそこの嘱託をしておつたのだが四十年に亘る在官と連合会在職の功が認められ今回正六位勲四等の叙位叙勲があつた。洵に名誉な話でさぞかし故人も喜んでおられることゝ思う。

そして葬儀は役所と連合会及び子弟の関係先から約五百名の参列者があり彼一生の終末を飾るに洵にふさわしいものがあつた。

兄貴を失つた悲しみと落胆は実に強いものはあるが、その一面あの盛大な葬送を見て私は今更乍ら彼の人徳の偉大さをたゝえると共に併せて彼の永遠なる冥福を祈つて止まない。

思い出

川内生

着物や洋服には柄があつて人によつて好みが違い行く先によつて色柄を変えるのが常である。

未熟者の私には数々の失敗はあるが、去る懇親旅行の酒宴の席で余興にかくし芸が飛び出す程一同がご気嫌になつている頃、大先輩であるT土地のK氏が大変ご気嫌よろしく大広間の中央にあつて唯独り徳利片手に手酌と云うご満悦振である。その内私の姿を見て何かかくし芸を披露せよと矢の督促であるが私は無調法で何も出来ないからとお断りをし一言二言、言葉のやりとりをしている間に彼は私に対して聞き捨てならぬことを云い出した。冗談にも程があると憤慨し前後の見境いもなく食つてかゝろうとした折柄隣席にいたD不動産の子息S君、従業員のK君、Y不動産のH氏が仲に入り私をなだめてくれたのでその晩は我慢し、翌朝早々に談判に行こうと思つていた。

ところが翌朝K氏が先に私の部屋を訪れ昨夜はどうも・・・と丁重なるご挨拶、こうやわらかに出てこられては今までの怒りもどこえやらで却つてK氏の人となりがいかにも大きく見えそれに引替え私の姿が段々と小さくなつていく様な錯覚をおぼえた。

そして行先場所によつて色柄を変えなければならないことに気付いた私である。

キャバレーにまさかモーニングを着ていく馬鹿はないその馬鹿者が私だつたのかもしれない。

禍を転じて福となすの諺通り私はこの禍を以て将来の福としたい考えでいる。

現在長期療養中の私は段々立ち遅れてマイナスになる様な気がするが入院も又精神修養の一つであることを悟り自己満足をしいる今日この頃である。

K氏はもとよりH氏、S君は私に大いなる反省を与えてくれた大の恩人であることを感

謝し忘れてはならない。

尚入院中支部とあすなろ会から過分のお見舞を頂き洵に有難く、おくればせ乍らこの紙上を拝借してご厚礼を申上げると共に各位の健闘を祈つて止まない。

一口随想

秘書（五）

戦前は大臣が更迭すると必ず伊勢参宮をする。多いときは年に二人も大臣が更迭して一年の内に二度もお伴して参宮したことがある。

尤も大臣の参宮ともなると大低東京から特別車が一輛つくので随員が如何に多勢であつても車内は楽なものである。

殊に警視庁からは二人の警官が出発より帰京まで、又車が通過するその府県の地域には府県の警官が一名づつ添乗して警戒に当るので車中に於ける秘書の役割は割合に呑気である。

唯大臣が政党人であると、にわか仕立の秘書官が一名も二名も随行してくる。これが昨日まで新聞記者であつたり或は会社の平社員であつた者が特別任用により一躍高等官という肩書をもつ秘書官となるので、まるで町人にわか仕立の金ピカをきせたのと同様秘書的な仕事は何一つ知るのではなく自分では気をきかせたつもりがとんでもない失敗を仕出かすことが多い。

秘書を本業とする吾々からみれば洵におかしな存在でもある。

そこで昔から大臣が参宮するのは一つの儀式であるので、厳粛に行なわれるのが常であるが、そんな場合秘書官が失敗した例をみると神宮の境内には二つの門があつてその奥の門の雨だれきわまで大臣は参進して礼拝するが官等の低い秘書官は入口の門をくぐつたところで停止し参拝せねばならぬことになつているのをつかつかと大臣と一緒に奥の門の雨だれぎわまでついて行き神官から注意を受け後戻りをするという場面もあつた。

こうしたことは神宮に参拝している大衆の前で行なわれるのであるから余計にその失敗が目立つものである。

又大臣が参宮した場合その序に自分の選挙区へお国入りをすることが多い。こういう時は大臣も大変だが直接大臣の身辺に付添う秘書も並大低のことではない。

一日に何回となく演説をしその都度祝杯をあげる、村の鎮守に金一封を持つて参拝する、宿に帰れば幾つかの陳情団が攻めかけ一方には友人が訪ねて来る、関係官庁の長がきて、所管事項を説明する等全く目の廻る様な忙がしさである。こうした時に大臣に会わしてよいものと会わすと都合の悪いものがあり、いろいろと面会時間等の関係もあつてうまく立廻つてさばいてゆくところに秘書としての大きな役割がある。

勿論大臣はお国入りをしなくとも常に寸分の余裕がなく年中多忙であるので大臣になるのには金もいるが体も又健康でないと一日として務まるものでない。

最近お国入りした大臣に兎角の批評はあるが実際問題としてお国入り等の場合はなかなか公私の別を区分することがむつかしく、従つて昔はそういう問題は余り出なかつたものである。

雑談二題

高野生

㈠ 人は勉強次第

糸すゝき　ほていの腹に　はれがきて
あられまじりの　金槌がふる

これは大閤が歌を習い出して始めて作つた歌である。

歌の師匠曰く、歌は始めは細々と辷り出しまん中はうんと太り終りはキュットすぼむ様な形で五、七、五、七、七と句調を合わせ乍ら作らねばならないと。

これを聞いた大閤、よしきたとばかり即座に始めは　糸すすき　と出た。そしてまん中はうんと太らせてと云うのだから　ほていの腹にはれが来て　と終は金槌の様に尻すぼみで　あられまじりの金槌が降る　とやつてのけた。

成程句調や語呂は洵によいが何を歌つておるのやらサッパリ意味がわからず大閤らしい歌である。

だがこんな大閤も老境に入つてからは一ば

しの歌人となつたと云う。
人は勉強次第である。

(二) 大　蛇

山の谷間で然もすゝきが背高に茂つている中で一匹の蛇がトグロを巻いているのを見た。これは兎をとるために昼夜待ち受けている自然の姿である。

尤も兎と云うやつは人こそ知らないが何日も通る道がきまつていてそこ以外は通らないのが普通である。それを又敵である蛇が知つておるのであるから不思議である。

私はこのトグロを巻いた蛇の状態を毎日観察することゝしたが到々或日一匹の子兎がこを通り抜けようとして蛇にかまれ、それが幾日かの後呑まれてしまつた。

二m位の青大将でよくも子兎が呑めたものだと思う。唯頭と尻ポは普通の青大将だが胴体はビール瓶位にピカピカと太り呑んでから廿日位はその場から離れなかつた。

日本ではそう云うビール瓶大の大蛇はおらないが遇々胴体のみを見てあの山には大蛇がおると騒ぐものである。

青大将の様な蛇が子兎を呑む、それは気性の然らしむるもので吾々人間も小人と雖も大仁を呑む丈の気慨さがほしいものである。

四十二年度 宅地建物取引主任者試験要領決まる

試験日　六月十一日（月）
　　午後一時ー三時
場　所　未　定
申込期日　五月上旬ー五月十二日まで
尚詳細は四月中旬の官報で発表の予定

編集後記

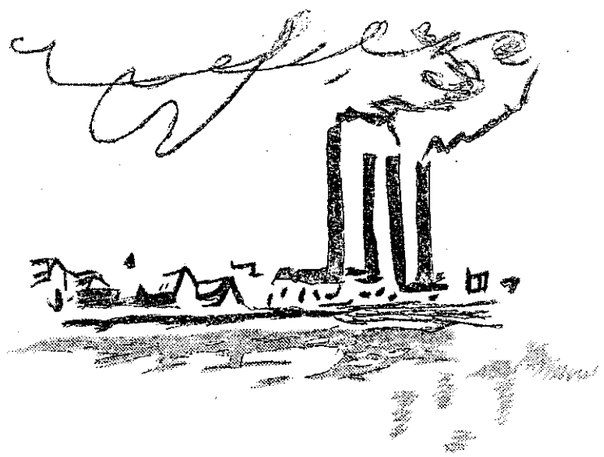
○三月ともなればもう春だ何んと云うても春は一年中一番よい季節である。

○府中本町駅前にボーリング場が出来た又府中名物の一つがふえたとも云える。

○二月末に新しい理事が選出された。二年間ご苦労であるがどこの支部にもまけない様な立派な支部にしてほしいものである。

○景気は過熱すると言う。過熱とはどう云うことか学者の理論と実際はマッチしないものである。

○三月十一日現理事の最終の理事会が開催された。長い間本当に御苦労といわざるを得ない。

昭和四十二年三月十一日夜しるす

高　野